

名誉会員 和達清夫博士の文化勲章受章を祝う

畠山久尚*

昭和60年11月3日の文化の日に本学会名誉会員 和達清夫博士は文化勲章を受けられた。同博士は昭和46年11月4日にすでに文化功労者に顕彰されていたので、遠からずこういう日が来ることは誰も期待していた処であるが、今回いよいよそれが実現して、本当におめでたいことであった。

和達博士は明治35年9月8日名古屋市の生れで、東大理学部物理学科在学中に関東大震災を体験、大正14年3月卒業後直ちに中央气象台に入り、地震掛勤務となった。間もなく同年5月23日に北但馬強震が起こって、同掛主任の国富技師が実地調査に出張されたので、その留守番役で、地震計の観測と、地震があった時の発表の責任を持たされた。これが後年大成された「深発地震の研究」に取り付け発端になったと言う。この辺のことは前から異常震域をもつ地震と言われていたもの、モホロビッチ波のことまで含めて、最近同博士御自身が「気象」の昭和59年5月号から10月号まで「気象台回顧一大正の終わり頃を中心に」と題して連載されたものの中に書いてある。深発地震の研究の第1報は昭和2年の「気象集誌」に、同じく英文では昭和3(1928)年の「中央気象台英文彙報」に出ている。これは後年のプレート・テクトニックスの考え方の基盤を与えたものである。

不幸なことに和達博士は胸をわずらって、昭和4年11月から暫らく退官して療養されたが、同6年6月には元の職場に復職された。そして同7年3月には、東大から理学博士の学位を、同年5月には帝国学士院から恩賜賞を受けられた。

昭和9年9月関西方面に大被害をもたらした室戸台風がきっかけとなって、大阪には日本学術振興会災害科学研究所が出来、同11年9月には中央気象台大阪支台長兼学振災研第1部長として赴任された。気象台の方の観測、予報、通報の仕事の整備、充実に務められる一方、災害科学研究所の方の仕事で一番力を入れられたのは地盤沈下の問題で、西大阪での細かい実地観測から、沈下の原因は地下水の汲み上げにあるとするものだった。これは災研報告の2冊に亘って掲載されたものであった

が、発表当時は残念ながら世間一般には認められず、戦後の復興期にあちこちの工業都市で沈下が起こって来た時に漸く認められ、今日の地盤沈下対策の基盤となっている。そのほか大阪の大気汚染調査等もあるし、またエマグラムを使った対流による可能降水量の推算の研究もこの時期にその端を発していることと思われる。

昭和16年3月には一旦中央气象台に帰任され、付属気象技術官養成所主事や研究部長をされた。昭和18年12月には中央観象台長として旧満州国新京に赴任されるが、終戦直前の昭和20年7月には再び中央气象台に帰任され、予報部長兼総務部長として、また昭和22年3月からは中央気象台長(後に気象庁長官)として、戦後の困難な時期の乗切りとその後の発展に当たられた。

気象業務に関しての功績の顕著なものだけを列挙してみても、昭和27年6月気象業務法の制定、昭和28(1953)年4月世界気象機関(WMO)加入、昭和29年9月気象レーダー設置、昭和31年7月中央気象台から気象庁(外局)への昇格、昭和34年3月電子計算機による数値予報の導入等々がある。

昭和38年3月気象庁を退官されたが、その後は国立防災科学技術センター所長、埼玉大学長を歴任された。傍ら昭和24年1月からは日本学士院会員(同院長も勤められた)、昭和23年12月からは日本学術会議会員(会長の期間もある)にも選ばれている。このほか審議会等の委員、会長を多い時には総数30以上も引き受けておられた。

今回の和達博士の文化勲章受章を予知していたかのようにも見えるのであるが、アメリカ地震学会は昭和55(1980)年に第5回の表彰で賞牌を贈っている。その記事は同学会のBulletin(Aug. 1981)に出ている、当時会長の安芸教授がユーモアたっぷりに表彰文を書いている。WMO Bulletin(1985年第1号巻頭)には、その編集者が来日して和達博士との質問応答の形式での会見録が12ページにわたって掲載されているが、これもなかなか面白く出来ている。

御健康に留意され、お元気に今後を過ごされることを願って筆をおく。

* Hisanao Hatakeyama, 本学会名誉会員。